

# 風景の近代

## 写実から心景へ

### Modern Landscapes: From Realistic to Feeling

「風景」は、古くから洋の東西を問わず描かれてきた画題です。日本においても実に様々な風景画が描かれてきましたが、明治という新たな時代の幕開けとともに興隆した「洋画」により、その様相は大きく変化します。

黎明期の洋画において欠かせないのが、1876（明治9）年に開校した「工部美術学校」の存在です。西欧諸国に比肩するため、明治新政府が殖産興業の一環として設立した学校ではありましたが、政府の思惑とは別に、浅井 忠や小山正太郎らの画道を志す若者たちが集まりました。しかしながら、財政難によりわずか7年あまりで閉校。さらに、これまでの欧化政策の反発により、洋画は不遇の時代を迎えます。その間、彼らが身につけた「写実」は、外国人観光客が買い求めた、日光などの名所を題材とした「おみやげ絵」の制作に利用されたのでした。

明治の半ば、黒田清輝が印象派風の明るい色彩を携えて帰国したことを機に、洋画は次第に認められるようになり、明治末から大正にかけては、水彩画の普及と自然主義文学の台頭により、身近な風景に美が見出されるようになります。

そして昭和の始め、画家たちは西洋の模倣から脱し、自己の画風を確立します。とりわけ、日本画・洋画ともに独自の画境を開きつつあった小杉放菴と、還暦を過ぎて「単純化」の境地に至った藤島武二が代表的な存在として挙げられます。彼らの風景画を見ると、タッチや風景へのまなざしに、画家の個性が表れていることが明らかになります。

「写実」的に描かれた風景は、いかにして「心景」へと変化したのか。本展は、近代日本の風景画の変遷を当館の所蔵作品でたどるものです。

#### ■ 開催概要

※新型コロナウイルス感染症の状況により、会期等が変更になる可能性があります。

展覧会名	風景の近代 一写実から心景へ
会期	2021年2月20日（土）～4月4日（日）
休館日	毎週月曜日
開館時間	9時30分～17時（入館は16時30分まで）
入館料	一般730（650）円、大学生510（460）円、高校生以下は無料 ※（ ）内は20名以上の団体割引料金 ※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、日光市公共施設使用料免除カードの交付を受けた方とその付き添いの方1名は無料 ※第3日曜日「家庭の日」（2月21日、3月21日）は、大学生は無料
主催	公益財団法人 小杉放菴記念日光美術館／日光市／日光市教育委員会

## ■ 展覧会構成 (作品はすべて小杉放菴記念日光美術館蔵)

### I. 実用のための写実

1868年、「明治」という新たな時代が幕を開けます。西欧諸国に追いつくべく、富国強兵を掲げた明治新政府は、殖産興業の一環として、1876（明治9）年に「工部美術学校」を開校します。教師はイタリアから招聘され、政府の思惑とは別に、浅井忠や小山正太郎らの画道を志す若者が集まりました。しかしながら、財政難により7年あまりで閉校。さらに追い打ちをかけるかのように、これまでの欧化政策の反動から、洋画の排斥運動が起こり、画家たちは「冬の時代」を迎えます。

その間、小山の不同舎に代表されるように、画家たちは画塾を開いて後進の指導にあたったほか、東照宮や神橋などの名所を写実的に描いた「おみやげ絵」の制作をして、春の訪れを待ちました。

本章では、おみやげ絵を中心に不同舎の画家たちが手がけた風景画をならべ、逆境の中、いかにして「写実」と向き合ったのかを探ります。



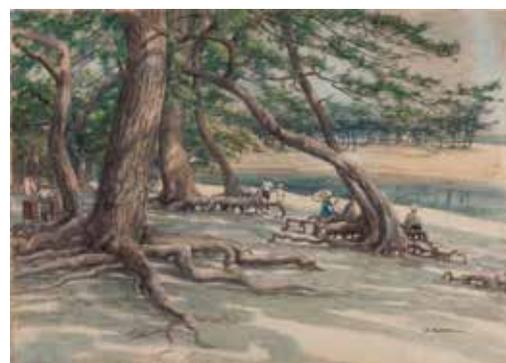
画像1 国府浜国太郎（小杉放菴）  
《東照宮・陽明門》1900（明治33）年

### II. あるがままの風景を描く

1893（明治26）年、黒田清輝がフランスから帰国したことを機に、洋画を取り巻く状況は一変します。自由を掲げた美術団体・白馬会が黒田を中心に結成されたほか、これまで日本画科しかなかった東京美術学校（現・東京藝術大学）に西洋画科が設置されるなど、社会的に洋画が認められるようになります。

黒田が日本の洋画にもたらした変化といえば、印象派風の明るい色彩がまず挙げられますが、もう一つは風景に対する「まなざし」でした。これまでのおみやげ絵に見られる名所絵的視点から脱し、画家が感興を覚えた「あるがまま」の風景が描かれるようになります。

それぞれの画家の筆致はもちろん、風景への「まなざし」の違いをご覧ください。



画像2 河合新蔵《海岸風景》制作年不詳

### III. 心景へ

1930年代は、画家たちが西洋の模倣を脱し、自らの画風を確立した時期でした。その代表的な存在として挙げられるのが、藤島武二と小杉放菴です。

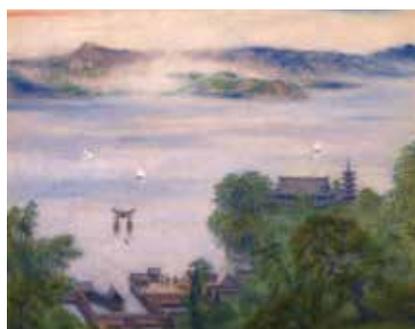
浪漫主義的な画風から出発した藤島は、38歳での初渡欧を皮切りに、自らの画風を追求し続けました。そして、還暦を過ぎた頃、フランス語で単純化を意味する「サンプリシテ」の境地に至り、海や山、日の出の風景を荒々しい筆致で捉えるようになります。

一方、パリで東洋的世界に開眼した放菴は、帰国後、次第に日本画へ制作の軸足を移すようになります。そして、1929年頃から、越前の紙漉き職人・岩野平三郎<sup>いわのへいざぶろう</sup>によって特別に漉かれた麻紙<sup>まし</sup>「放菴紙」を用いたことを機に、自らの画風を確立します。彼は、胸中にある理想的な風景を捉えた山水画を麻紙の特質を活かし、墨と淡い色彩のみで描きました。

画家は風景に何を見て、いかにして描いたのか—2人の巨匠の作品を中心に、「心景」をご覧ください。



画像3 小杉放菴《水亭》  
1932（昭和7）年



画像4 小杉放菴《叡島風景》  
1933（昭和8）年



画像5 藤島武二《屋島よりの展望》  
1932（昭和7）年

### ■ 主な出品作家

小杉放菴、五百城文哉、河合新蔵、山下新太郎、藤島武二、猪熊弦一郎、小磯良平 ほか

### ■ 広報用画像

本リリース掲載の作品図版を、本展広報用画像としてご提供いたします。図版に付した1～5が図版番号です。ご希望の場合は、展覧会担当までメールにてお申し込みください。その際、会社名／雑誌等名／ご担当者名／連絡先／希望画像の番号を明記してください。

## ■ 関連イベント

担当学芸員によるギャラリートーク（予約不要・要入館料）

2月27日〔土〕・3月27日〔土〕 各日11時～

※新型コロナウイルス感染症の状況により、中止になる場合があります。

## ■ 次回展予告

日光に生まれて ―6人の画家の風景

4月10日〔土〕～6月20日〔日〕

## ■ 本展に関するお問い合わせ先

小杉放菴記念日光美術館

〒321-1431 栃木県日光市山内2388-3

Tel: 0288-50-1200 Fax: 0288-50-1201

担当学芸員：清水友美

E-mail: [shimizu-tomomi@khmoan.jp](mailto:shimizu-tomomi@khmoan.jp)